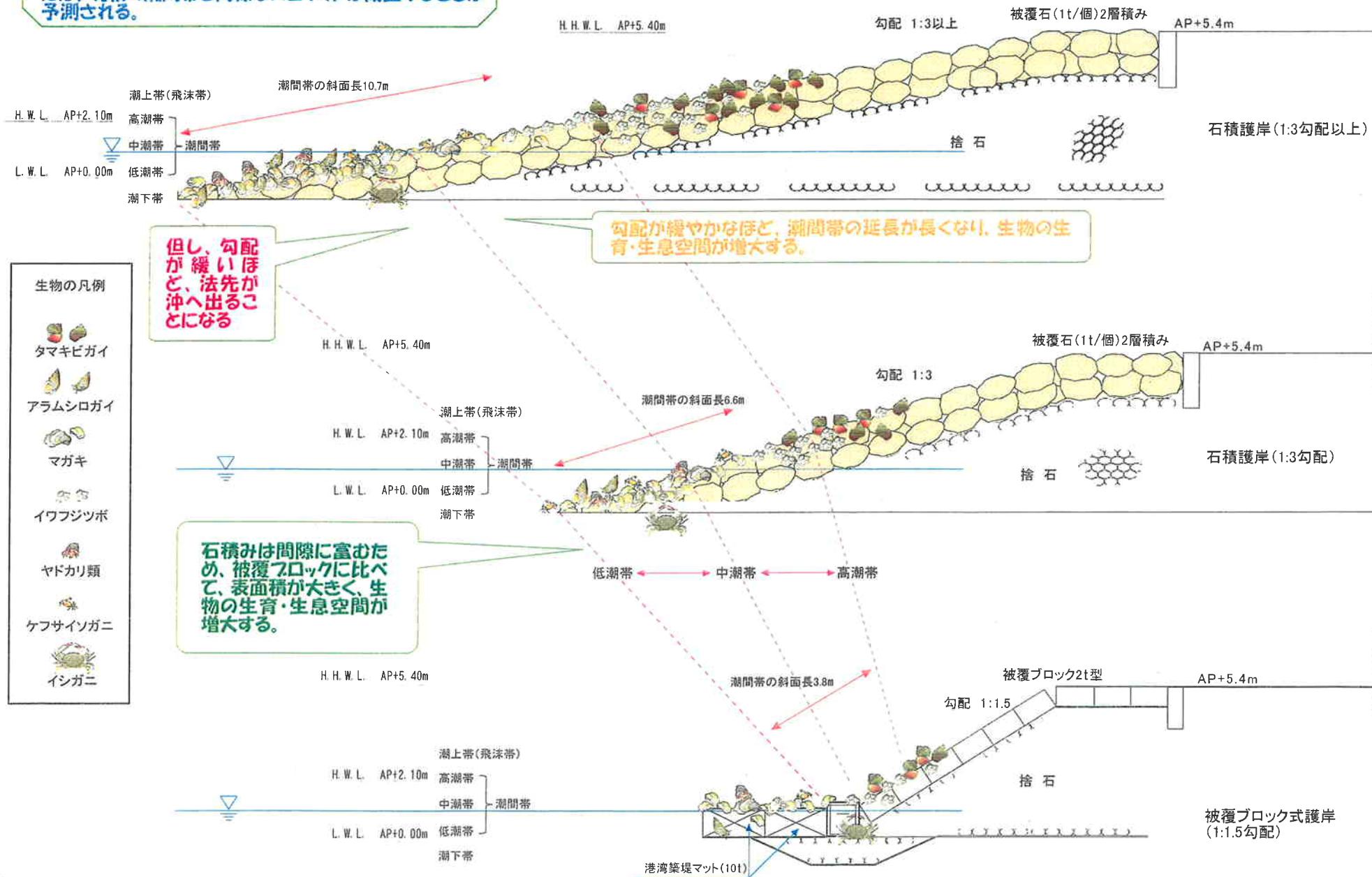


図-4 護岸改修後のハビタット復元イメージ

周辺部に同様な潮間帯のハビタットが分布すること、施工が段階的に進められることなどから、改修後の護岸には、現状の潮間帯と同様なハビタットが成立することが予測される。



(4) 類似事例による検証

護岸改修後の潮間帯のハビタットの復元状況を把握するため、東京湾内の石積傾斜堤を対象に現地踏査を実施した。(平成17年3月27日、一般市民参加の付着生物調査)

図-5には、市川海岸近傍の千葉港習志野海岸の石積傾斜堤における調査結果を示す。

この護岸は、石積による勾配1:3の護岸であり、完成後、約一年半が経過している。

潮上帯(飛沫帶)には、タマキビガイ、アラレタマキビ、イワフジツボなど乾燥に強い生物が分布する。

高潮帯は上記の潮上帯の生物

の他に、タデジマイソギンチャク、ムラサキイガイ、コウロエンカワヒバリガイなどが分布する。

中潮帯～低潮帯では、積石の陽の当たる部分は、緑藻類のアオノリ属が一面に繁茂する。日陰の部分には、タデジマイソギンチャク、カンザシゴカイ科、マガキが優占し、他にムラサキイガイ、コウロエンカワヒバリガイ、イボニシなどの貝類が多くみられた。

習志野海岸では、施工後約1年半で潮位に応じた潮間生物群集によるハビタットが形成されたことになる。

習志野海岸の潮間帯生物の構成は、アオノリ属の繁茂やムラサキイガイの生息等を除くと、市川海岸の潮間帯生物の構成に類似している。従って、この様な類似事例から市川海岸においても、数年単位の潮間帯生物のハビタットが復元されることが期待される。

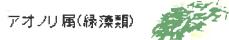
図-5 付着生物調査結果(千葉港海岸習志野地区)

付着生物観察結果

調査年月日：平成17年3月27日10:40～11:30

観察位置 (標高 + 頻度%)	植物 (種名 + 頻度%)	動物 (種名 + 個体数)
A.P.2.0m (H.W.L.)	-	アラレタマキビ(20)
	アオノリ属10%	イワフジツボ(20) アラレタマキビ(18) マガキ(4)
	アオノリ属60%	マガキ(30) タデジマイソギンチャク(4) コウロエンカワヒバリガイ+ ムラサキイガイ(2) イワフジツボ+ イボニシ(1) タマキビ(3)
A.P.1.0m (M.W.L.)	アオノリ属60%	マガキ(4) ムラサキイガイ(1) イボニシ(1) タデジマイソギンチャク(20) タデジマフジツボ+ コウロエンカワヒバリガイ+ カンザシゴカイ科+
	アオノリ属50%	ムラサキイガイ+ セイヨウハリナリ(1) タデジマイソギンチャク(1) コウロエンカワヒバリガイ+ マガキ(3) カンザシゴカイ科+ イソギンチャク目(3) タデジマフジツボ+
	アオノリ属50%	コウロエンカワヒバリガイ+ マガキ+ タデジマフジツボ+ イソギンチャク目
A.P.0.0m (L.W.L.)	アオノリ属80%	コウロエンカワヒバリガイ+ ムラサキイガイ+ マガキ+
	アオノリ属60%	コウロエンカワヒバリガイ+ ムラサキイガイ+ タデジマイソギンチャク(19) レシガイ(1) マガキ+
	アオノリ属80%	ヒドロ虫+ セイヨウハリナリ+ カンザシゴカイ科+

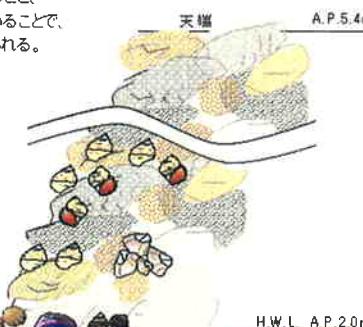
海藻藻類凡例



アオノリ属(緑藻類)

調査地全景

平成14年度竣工の石積護岸。護岸の勾配は1:3である。
概ね、H.W.L(高潮位)付近までは飛沫などで常に湿っていること。
M.W.L(中潮位)付近まではアオノリ属等の藻類が繁茂していることで、
高さ(冠水頻度)の違いにより生物の生息状況に違いがみられる。



冠水頻度の高い場所では、
日射の当たる岩の表面は
主にアオノリ属(緑藻類)で
覆われる。
また、岩の陰や隙間にには、
乾燥を嫌うカンザシゴカイ
科やイソギンチャク類など
が密集して生息している。

L.W.L. A.P.0.0m



※この断面図は、日本の都合上、実際より
横方向を縮めて垂直になってしまいます。

